

与謝蕪村のよく知られた句「きのふの空のありどころ」き。茫漠たる空をぐっと引き寄せ蕪村の目。この句を読めば、空が確かなかちをもつて見えてくる。

俳句について疎い僕としては、その解釈はさて置き、ここでは蕪村の絵と絡めながら少し考えてみる。

たとえば、京都の町並みを描いた「夜色楼台雪万家図」。今、きのふの空のありどころの時代にはない、

月明かりだけの夜の濃さと雪そのものの白さ。落莫とするも、そこにはしみじみとした命のあかりが灯る。懐深く誘われる静けさとぬくもりの情景。けだし、哀調などぐさぐさ流れ流されるものではない。

ら、繰り返し見て来たはずの空がいまハッキリと自分のかたちとして見えた。常に視界に入るものが見えているわけではなく、自らの内に捉えるのは難しい。蕪村はこの時、からだと空を受け止めたのだろう。まげて「ありどころ」

たと同じ目は当然言葉の世界



であり、その洞察が俳句という短い言葉から立ち上がっているように思える。僕が絵に描きたいのもそののだ。空を描く、抽象を描くということではない。空漠とした最初の一筆に始まり、画布の上に見ぬものを探し、掴まえ、

定着しようともがく。そのタッチの連続の問いかけが僕に絵を描かせる。特定のイメージから出発するのではなく、過去に育み内包されたものはそのままに、今の瞬間にかける。手を通して追う中で生まれくる、確とした自らの現実のかたちを知りたいのだ。

今しもそこに見えるような気がする、そしてまた遠のき、迷い、次には少しの光が射す。そんな未来との接点を身を置き「ありどころ」を求めて絵を描いてゆく。

蕪村は「きのふの空」という言葉の中に、普遍的な見え方としての確信を得ているのだろう。間違いないのだ。空があったのだと。だからこそこの句に、また雪景色の絵に、憧憬と親しみを持ってやまないのだ。

(吉田 淳治・画家)